

教会と神学部の集い～座談会～

2013年11月14日

16:30～20:00

於) 関学会館ベーツチャペル

インタビュアー：神田 健次 教授

話者：中條 順子 氏 (元宗教センター職員)

前島 宗甫 氏 (元関西学院大学宗教総主事)

神田：戦後の新しい神学部の歩みにとって、前提となるのが、戦時下で神学部が一旦閉鎖されるという出来事であります。お手元の略年表を出して頂きたいと思います。実際には1943年5月18日に神学部が一旦閉鎖されているわけですね。そして、1945年の終戦後に、理事会で真っ先に議題になったのが、神学部を復興する決議というか、問題提議がなされて、それが前向きに審議されて、新制大学の枠組みで、最初は文学部神学科として出発します。1948年のところを見て頂くと、そこに、文学部神学科からスタートするということが書かれています。そのまた4年後、1952年に神学部が学部として独立して復興するという、そういうプロセスがあります。戦前と戦後の様々の違いもあるんですけども、2つだけ申し上げますと、1つは、戦前は専門学校だったんですね。一貫して神学部は専門学校でした。それが、戦後、新制大学の総合大学の一学部として位置づけられるという、まったく新しいステージになってくるわけです。それからもう1つは、戦前は基本的には日本メソヂスト教会の教職養成機関でしたけれども、戦後は、メソヂストだけではなくて、合同教会としての日本基督教団の教職養成機関として、認可神学校になるんですね。その辺が大きな違いになっています。

今日お迎え致しましたお二人の方を、みなさんもよくご存じの方ではありますが、お一人は、中條順子さんです。中條さんは、私たちが学生時代、宗教センターにいらっしゃって、宗教センターで本当に大きな働きをなされた方です。1947年に神学部に入學されておられます。戦後一番最初に入られた学生はですね、城崎先生。46年に入っておられますね。2番目に47年に入學されたのが、中條さんです。だから、新制大学の文学部神学科になる前の年に、旧制の時に入っておられて、その当時どうい

う勉学生活だったのか、学生生活だったのかといったことを是非、今日はお伺いしたいなと思っております。それから、もうお一人は、前島宗甫先生ですが、かつては、エキュメニカルなリーダーでありましたが、今はアメリカンフットボールの顧問格として、大切な祈祷の役割を担って活躍しておられる大先輩です。前島先生は中條さんより、約10年後に入学されておられますね。1956年に入学されて、約6年間、安保という難しい時代も学生時代経験しておられます。このお二人の方をお迎えいたしました。今日は、戦後の一番最初の頃の神学部というのはどのような状況だったのかという辺りをですね、お伺いしたいと思います。お手元に年表を配布したのは、だいたいその頃の流れを見て頂きながら、お話をお聞きしたいなと思って用意致しました。

それでは最初に中條さんの方から、当時の入学された頃の辺りから口火を切って頂けたらと思います。

中條氏：今ご紹介頂きましたけれども、ちょっと訂正があるんです。成全会名簿には、1947年入学の中に入っているんですけども、私は、本当は1949年に神戸女学院から編入学したんです。向こうで専門部を3年間済ました上で、本当は1949年に第3学年に入りました。それで、その時は、単位認定というのがありまして、大学で、初めは教養課程みたいなのがありますけれど、そういうのはほとんど済ましていて、あちらは、家政学科保健科というところで勉強したんですけど、それでも、英語の単位が多かったと見えて、単位認定の時に、あなたは第二外国語を取らなくても、単位が十分にありますなんて言われまして、あーよかったなと思ったんですが、後々に、ドイツ語かフランス語かやっておいた方がよかったということが分かったんです。まあそういう経験をしまして、同学年にどういう方がいらしたかといいますと、大里喜三先生、それから岡和夫さんというちょっと年配の方もいらっしゃいました。それから、小林榮さん、仙波元さんとわたくしと、たった5人で。その次の学年には結構大勢いらっしゃって、青木研甫さんとか、内田政秀さん、大嶋信二さん、それから女子学生の中には、賀川梅子さん、まあ、その辺はご存じの方々も多いと思います。全部名前は言えませんが、そういう時代でした。

そして、とにかくわたくしは、父が戦後関西学院に復職しまして、家がないものですから、6軒の日本人住宅の中の、ちょうど保健館が今あるところに一番端の家がありまして、そこへ長野から帰ってきて住むことになったんです。そこから神戸女学院に通っていたんですけども、下が私たち田中一家が住んで、上に、畑歎三一家が住んでおりました。そういうところですので、関西学院の神学部に入りたいと思ったのも、ごく自然の成り行きでした。教会は神戸東部教会で、相浦先生のもとでだいぶ訓

練を受けまして、もっと神学のことについて勉強したいなぐらいの気持ちで、どうせ、家からも近いし、教職員の子女は授業料半免で、外国人の方から奨学金も頂きましたので、あんまり学費もかからないしってぐらいの感じでした（その頃学院の教職員の給与レベルは低かったのです）。そして、百年史の中で、最初の神学部が申請したときの開講科目っていうのを見ましたら、19科目ぐらいあるんです。なにしろ戦後初めてのスタートで、2年ほど前ですか、城崎先生が、関西学院神学部の歴史についてお話になったときに、とにかくはじめは、選べる教師にお願いできる開講科目をっていうことで、結構まだ、多くはなかったです。ですから、旧約聖書を習ったのは相浦先生、そして新約聖書を習ったのも相浦先生でした。そのときに、どういう資料を基にして創世記ができたかっていうのを色鉛筆で色分けしようとか言われて、それを色分けした聖書がここにありますがけれども、本当にまだ紙質が悪くて、昔の活版印刷ですからデコボコしたようなページで、裏のページが透けているような、大変な代物でした。一生懸命それを、祭司は緑でとかなんとかそんなんで、真剣に色分けしたのを思い出します。

神田：まず、当時から資料問題とか色々苦労しているんだなということがよくわかりました。しかし、これは貴重なものですね。

中條氏：最初のページは破れているんですけども…。

神田：大切に保存しておいてください。

中條氏：今どうても読めませんが…。

神田：はい。それでは、その10年後に入学された、前島先生に、学生生活のことはまた後で伺いますけれども、入られた頃のこととか、勉学の様子を少しお聞きしたいと思います。

前島氏：ちょうど10年後になるんですね。勉学の様子というのは弱い分野なんですけれども。私が入ったときは、ちょうど原野和雄先生のお父様が学部長になられた時です。13人入学しましたね。13人入学して、1学期、最初の前期が終わった時に2人いなくなりました。これは、非常によくできた2人で、優秀な2人がどういうわけか抜けてしまったんです。あと11人が残って、そのまま大学院に進んで、卒業しました。2人が女性でした。その女性以外の9人が全部牧師になりました。そういう時代です。

授業のことで思い出すのは、非常に基本的なことを教えてもらったっていうのが、私のベースになっているっていうことがあります。例えば、聖書時代史っていう授業があったんですけども、旧約の時代史の一番最初に城崎先生が、来週までに旧約聖書の創世記からヨハネ黙示録まで全部覚えてこいと。神学校で2年にもなつとんに、教会学校の子ども扱いしとんなど、みんなで言ってたんですけども。しかし、

その次の週だったと思うんですね、同じ城崎先生が、英語の授業だったと思うんですけども、今度は創世記から黙示録まで、全部英語で覚えてこいっていうんですね。Genesis から Revelation まで、英語で書かされたんです。こういうのが以外に役に立ってるんですね。授業の中身よりも、むしろそういうことの方が牧師になって非常に役に立ったといえますか、そういうことがあったと思いますね。

神田：ギリシャ語のことを思い出されたようで、どうぞ…。

中條氏：ギリシャ語はノルマン先生が教えてくださって、初めは6～7人程いたんですけど、だんだん人数が減って、とうとう私一人になってしまって、先生が家へ来ないかっておっしゃって、1時間目の授業だったので、さっとノルマン先生のお宅へ。6番館だったか外人住宅に行行って、玄関に入って右の書斎のような所へ入って、ホットコーヒーが出てきまして（当時は本人の家庭ではまだ珍しいものでした）、それを頂いて、やおら勉強に入るといのが、1年間それが続いたかと思います。後の方になって、ちょうどそのときに、高柳伊三郎先生（新約学者）が訪ねて来られて、なんかちょっと色々お話をして、ちょうど採点をするような答案用紙があって（わたくしのなんですけど）、それを採点して下さったっていう、こういう経緯もございました。非常に優雅な勉強をしたんですけど、あまり今は覚えておりません。

前島氏：ちょっとフォローしていいですか。

神田：どうぞ。

前島氏：あのお、優雅じゃなかったんですね。ギリシャ語の授業は小林信雄先生なんですけども、どんどんどんどん進むんですよ。テキストをずっとやっていって、それで問題集っていうのがあって、例題が出てるんですけども、それを全部残していくんです。で、夏休みに、その1から5までは一週目、二週目は6～10までっていう形で、その答案を全部小林先生のところに送るんです。毎週。でそれが添削して返ってくる。これはすごかったですね。これをやられた先生もすごかったとおもいますね。ぼくも教えた経験ありますけれども、そんなことようせんあと思いながら教師してました。小林先生と同じように、城崎先生のヘブライ語なんかでもそういうことがありました。だから夏休みなんか結構そういう形で勉強させられたというのがありますね。

神田：当時は古典語が必修だったんですね。

前島氏：そうです。

神田：まあそういうことで片や優雅な時代、片や大変な時代ですね。

中條氏：新約聖書の講読みたいなのは、原野先生と、アウターブリッジ先生。アウターブリッジ先生はもちろん英語もなさいました。文学部で、宗教学概論か何か、片山正直先生に他の学科の人たちと一緒に聴講したわけですけども。覚えてらっしゃ

る方もおありと思いますが、片山先生は（もちろんその頃はマイクもありません）、講壇を行ったり来たりしながら、名調子で講義をなさって、それを私たちは懸命になってノートをするんですが、ノートを読み返しますと、本当に立派な文章だったのです。ですけれども、もちろん冷房暖房もない、本当に冬は寒い教室で縮こまってしていましたし、夏は窓を開けて風を入れて勉強したわけですが、6月ぐらいに暑くなって、午後の授業ですと、芝を刈るブーンっていうモーターの音がしますと、なんとなく眠くなってくるといことがありました。

神田：ありがとうございます。まだまだ様々の科目を一つ一つ聞きたいところですが、ここでちょっと展開いたしまして、学生生活がどうであったかをですね、その辺もまた興味深いことですので、どうでしょうか、前島先生の方から。

前島氏：私は寮に入っていて、当時の成全寮です。寮生活は本当に僕にとってはよかったですね。自分の研究テーマなんかが決まってくると、先輩のアドバイスをうけました。それぞれ専門の先輩がいらっしゃるんですよ。遊びの専門家、歌の専門家。わたしは新約を専攻して、パウロやっただけですけども、そういうテーマに関しては、この本は絶対読め、という風にアドバイスを受けるんです。これは図書館で読め、これは買って持て、自分のものにして読めっていう、そういう風にしてリストができていくんですね。当時教文館のレートで400円やったと思うんですね、1ドルが。そういう時代ですよ。決して安くはない。だけれども、それを注文するっていうことが、何ていうかプライドっていうか、俺は神学やってんねんで！っていう意識を刺激されてですね、買えるのが楽しかったですね。バイトに精を出したっていう、そういうことがありますね。

寮で一つ優雅さを思い出したんですけども、私たち、出席簿を自分で作ってるんですね。どの先生とは言いませんけれども、ちょっとまあ休もうっていう授業がいくつかありまして、半分以上休んだらやばいですから、出席簿をつけてるんですね。「今日は休むぞ」言うて休んでたら、ポンポンって僕の寮の部屋の窓を叩かれるんです。誰や？と思ってぱっと覗いたら、松山事務長なんですよ。当時われわれは、松山部長！部長代理！っていう風に言っていましたけれども、松山さんが窓を叩いてるんですね。「なんですか？」言うたら、「前島くん、ちょっとなあ、授業に2～3人連れて出てきてくれ」っていうんですね。つまり誰もおらんっていうんです。通学生が1人だけしかおらんっていう。だから、2～3人連れて来いっていうんです。で、僕らの組で一番真面目な長尾くんっていうのがおったんですけども、彼の部屋行ったら、彼も休んどるんです。もうしゃーないから、何人かおるのを引き連れて、遅れてすいません言うて、教室に行っただけということもありました。その先生はその次ぐらいから、ご家庭に招いてクッキー付きの授業をして頂けたっていう、そういうことも

ありましたね。

神田：寮で伝説になってたストームとかそういうのはまだ？

前島氏：あー、いやいや、真っ盛りですよ。怖かったですね、そのストームにあった時は。寮監がいらっしゃって、忘れもしないです、松村先生です。松村先生は、時々泊まりはるんです。授業の前なんか。で、新入生歓迎会っていうのがあって、その日に限って松村先生、すたすた帰りはるんです。「ああ帰られるんですか」言うて別れたら、その晩ストームですよ。叩き起こされてですね、ドンドンって部屋を叩かれて、バツと目が覚めたら煙がもうもう。息ができないくらい煙がもうもうなんですよ。ほんで、バツと見たら、親切な先輩がですね、窓の外におりまして、「お前、本でもなんでもいいから出せ！おれが運んでやる！」言いはるんですよ。そんで本から布団からみな放り出して、頼んだら、後でみんな集められて裸にされてパンツ一丁で呼び出されて、閻魔さんの前で、散々しめあげられるんですよ。「お前、火事と思っ、何したか！」言うて聞かれるんですよ。何したかって「先輩が来てくれて、布団担ぎ出しました」って言うたら、「お前、誰の布団担ぎ出した！」って言うんですよ。「私の布団、担ぎ出してもらいました」って言うたら、「先輩にそんなことさして、自分がなんでせんか！」って。そういう風に怒られたりですね、ああ言えばこう言う。めちゃくちゃ言われて、色々なものを飲まされて、フラフラになって、あくる日、腹壊して、そういうストームでしたね。やられた方は大変やったですけども、やる方にまわってからは楽しかったですね。あんな面白いものはなかったです。

神田：中條さんの方から、学生生活で何か思い出に残っていることは何かあるでしょうか。

中條氏：わたくしの方はそんな野蛮な話はないんですけども。真面目ですから、学内伝道をするのは、宗教総部に属して活躍したらいいと思い、宗教総部みたいなところでやっていたんですけども、ある時、音楽好きの神学生が、大阪でメサイヤをやるうっていうことを計画して、北村先生はよくご存じだと思いますけど、大がかりに、その頃の関西交響楽団に頼んで、ソリストも、中山悌一とか、木下保とか、東京でオペラなんかで活躍している方4人揃えて、女性の方は、神戸女学院の野崎先生と、笹田和子さん、そういうソリストの方たちと。合唱団はどこがやったかよく覚えていないんですけども、とにかく、大阪の産経ホールか朝日会館ホールか、そんなところでしたのはいいんですが、私たちは手伝って、ポスターとか、切符売りとかした訳ですけど、大赤字を出しまして。その赤字をどういう風に修正されたのかも、私はちょっと覚えがないんですけど、そういう事件もありました。それから、神学部の中では、大体クリスマスの頃でしょうか、みんなで一緒に食事をしようっていうので、たいてい、ハミル館の下の広間を使って、すき焼きパーティーをしたわけです。

けれど、七輪から、食べる材料から、燃料から、お鍋とか、みんな運ばないといけないわけですね、女子学生が準備したりして、全員で手分けして運ぶんですけど、後々になってそういう学生時代のことを小林昭雄先生はいつも引き合いに出して、「僕たちはみんな女子学生にこき使われた」という風に表現をされるんですよ。そんなことないんです。みんなで一生懸命やったわけです。

神田：はい。ありがとうございます。前島先生がおられた頃に、日本全体を揺り動かすような、60年安保っていうのもありましたけれども、どんな感じだったんでしょうか。

前島氏：そうですね、60年安保は、まあ、学生運動のはしりっていうか、きっかけになったと思うんです。それがまあ70年に大きくなっていくんですけども、思い出すのは、頻りに集会やデモが行われて、大阪に出かけて行ったり、神戸に出かけて行ったり。色んなところでデモがあるんですね。それに合わせて行ってました。当時、城崎先生が、安保に反対するアジ演説をされてね。城崎先生は戦争の体験があってですね、ご自身が、学徒動員かな、出征される時に、日の丸に寄せ書きをされた。それを持って来られてですね、学生たちにアピールされるということもありましたし、一緒にデモに出かけて行って、神戸の大きなデモなんかで、城崎先生と腕を組んで、デモ行進をした、そういう経験がありますね。それをまあ、苦々しく思ってたっしやった先生方もいらっしやった。そんな先生方の方が多かったと思います。

中條氏：さっき、同じクラスの方たちと、次の学年の方たちのお名前を申しましたけれど、かなりの方が兵役を経験して帰って来られて、戦後の精神的な大転換を、自らの中で色々考えたり苦悩されたりした上で神学部に来られた方がいらっしやいましたので、やっぱりそれなりに厳しい雰囲気っていうのがまだ残っていて、私なんか、のほほんとしてましたから、ちょっと怖いおじさんたちがいるっていうような感じを受けたものです。

神田：今でも神学生が悩むのは、教会生活をしていて、授業のこととやっぱりギャップを感じる時がありますね。そんなことも含めて、教会生活がどういう模様だったかということ、それぞれ…。

前島氏：私たちの時代は、三回生から派遣制度がありました。ですから、私の場合は一、二年は母教会に出席してたんですが、三年から派遣されて、院に入ると論文のことなんかがあるので、自由になるんですけど、私の場合大学院も派遣されて教会生活をしました。夏期伝道っていうのもあったんですけど、それも含めてですねえ、牧会っていうのが何であるかっていうことを学ぶ貴重な時になったと思います。教会それぞれ性格が違いますし、それから先生方の牧会のスタイルも違います。そういうことを目の当たりにして勉強させて頂きました。一緒に食事もさせて頂いたり、それか

ら修養会や色々なところに一緒に出掛けていくという、そういう機会もありますから。そういう機会が非常に教会の行事だけではない教会の実態といいますか、牧師の実像っていうんですかね、そういうものに触れていく非常に大きな機会だったと思いますね。今はそういう派遣制度はないわけですが、それがいいのかなあ…っていう、わたしなんかはそういう風に思っていますね。

中條氏：わたしの時はまだ派遣制度っていうのはできていませんでしたから、もっぱら母教会の神戸東部教会で日曜学校で教えたり、教会員として生活を送りました。ですからあんまりギャップというのは…。自分自身の中では、神学部の授業は非常に新鮮で面白いけれども、自分の信仰の養いっていうのはやっぱり教会でしかないなっていうような感じはもっておりました。それから、説教学っていうのも相浦先生から習ったわけですが、一つだけ印象深く記憶しているのは、聖書からメッセージを頂いて、それを伝えるのに、ドラマティック・イマジネーションっていうのが必要だっていうふうに、相浦先生がおっしゃったのが頭に残っておりました。相浦先生は東北からアメリカに行かれた時には、画家をめざしてらしたということを知ったことがありますので、そこがつながるような印象を受けました。そして、随分後になってその言葉が新鮮によみがえってくるような経験を何度もいたしました。学生時代に一度だけ、何かのきっかけで、紀州の南部の升崎外彦先生が創られた労務学園っていうところに泊りがけで行きまして、そしたら升崎先生がちょうどお留守で、説教するようになって言われてびっくりして、どうやって説教作ろうかしらって、学生時代もチャペルで説教学の練習みたいに話をさせられたことはありますけれども、外でするっていうことはあんまりまだなくて、先輩の城崎先生に、どうやって説教を作りましょうかって尋ねたら、「基本的なことだけばっさり言えばいい」っていう風におっしゃって、一生懸命に前の晩に説教をこしらえて、なんだか難しい説教をしたのを覚えています。

神田：ありがとうございます。時間もぼちぼち迫ってきていますが、最後にですね、これまでいろいろな当時の状況が新鮮な形でよみがえってくるお話を伺ったわけですが、今の神学部、新しい歩みを展開しながら、随分当時とは違うあり方を含めて歩んできているわけですが、これからの神学部に対するお二人の思いとか期待等を含めて、一言ずつご提言を頂けたらと思います。

前島氏：神学部の学生には、今日、ランバス先生の足跡を改めてたどったわけですが、出かけてほしいなあという風に思いますね。出掛けて行って、色々な出会いをして、そこで色々考えて、経験を積んでいくということ。そのことから様々な学びをしていくっていう、そういう出掛ける学生がこの頃なんか少なくなっているんじゃないかっていう風に思っています。

それから、さっき紹介される時に、祈祷の役割っていう風に紹介されたわけですが、アメリカンフットボールの学生と試合たんに、事あるごとに一緒に祈ってるんですね。山内先生が訳されたランバスの『コールレクチャー』の中に、祈りの項目がありますね。私は『コールレクチャー』をいつも机の横に出してあって、よく読んでいます。その「祈り」の中に、祈りは労働であるという言葉があります。人が動いていくことの中で、祈りが育っていく。で、僕が先ほど、学生に出掛けてほしいっていう風に言うのも、志をもって動いて欲しい。志を立てて欲しいと思うんですよ。アメリカンフットボールの学生たちは、毎年新しいチームになってきちっと目標を作るんです。そしてスローガンも作る。で、その中で、祈りを共にし、そこで志を共にし、そしてその志を高めていく。志を育てていくという。まあ祈りはそういう作業だという風に思っているんですね。今の学生たちが、そういうことをするっていうのは、僕にとっては驚きだったんですよ。こいつらほんとにこういうことするんかと。つまり、僕や監督が「祈れ」って一言も言ったことないんですからね。毎年新しいチームになったら、主務が「先生今年もお願いします」言うて来る。辞められへんのですよ。牧師が祈ってくれて頼まれて、断れませんから。そういう学生たちがいるんだと。やっぱり、ランバスの精神を体得して欲しい。神学部 of 学生たちには。そういう意味で、志を高くもって欲しいなと思います。

中條氏：今ちょうど前島先生がおっしゃったことですが、私もランバスさんの『コール・レクチャー』を読んだとき、本当に深い福音理解にふれ、読みながら胸が熱くなるような思いをして感動したんですけれども、そのことに関して、山内先生の業績は大きいと思って感謝しております。戦後の歩みの中で、関西学院で精神的な炎を燃やし続けたのは、神学部ではなくて、ボランティアの宗教活動委員会とか、宗教主事の先生たちのチャペルとか、そういうところでそういう精神が、時に語られたり、祈りが続けられたりしたと思いますね。ですけれども、神学部も、大学の中では小さい存在かもしれませんが、精神的なリーダーシップをとるべきではないかと思います。せっかく開講科目も多様になって来たんですから、そういうところで『コールレクチャー』を英語で読むようなゼミがあってもいいなっていう風に思いまして、今日はそれを提案いたします。

神田：はい、どうもありがとうございました。大変貴重なご提言も含めて、感謝したいと思います。まだまだ色々お伺いしたいところですが、この後のプログラムもひかえておりますので、以上をもって座談会を終わらせて頂きたいと思います。それでは、前島先生と中條さんに盛大な拍手をお願いいたします。